

ハイ デイ

(第二十回)

津 田 芳 雄 譯

「いいねえ。そんなのだし、温くて息つかひも樂になるだらうねえ。だけごのお話はもう止めましょうね。世の中にはまだまだ氣の毒な病人だつてゐるのに、わたしはお蔭で毎日おいしい白パンがいただけるし、こんな温い肩掛けまで送つていただいたのだし、その上、ハイデイちゃんがお見舞に来てくれるのだもの。有難い、有難い。今日も何か読んでおくれ、ね？」

ハイデイは隣の部屋から讚美歌の本を取つて来て、次ぎ次ぎにおばあさんの好きな歌を選び出して讀んだ。おばあさんは手を組み合はせ、苦勞に疲れた顔に、たのしい知らせでも聞いた時のやうな安らかなほほゑみを浮べて聞いてゐた。

ハイデイは急に讀み止めた。

「おばあさん、もう快くなつて？」

「ああ、聞いてゐるうちに、だんく、快くなつて来たよ。おしまひまで讀んでおくれ」
ハイデイはつづけた。

まなこかすみ

闇せまり來れぎ

こころいよよ澄みて

旅路の果ての

つひの樓家すまがの

近づくぞ見ゆる

こころたのしや

おばあさんは、愉たのしげに何かを待ちももうけるやうな顔をして、この最後の句をしづがに繰り返した。ハイデイは自分が山へ歸つて来た日の、あの

美しい夕やけの景色を思ひ出し、うれしさうに叫んだ。

「おばあさん、『つひの棲家の近づくぞ見ゆるころたのしや』つて、わたし、わかるわ。おうちへ歸るつて、うれしいこころね」

しばらくするに、

「暗くなるから、もうかへるわね。でも、おばあさんが快くなつて、うれしいわ」

ミハイディが云つた。おばあさんはその手をしっかりと握りしめた。

「ほんごにね、お蔭ですつかり氣持が樂になつたよ。かうして、いちんちひさりぼつちで、人の聲も聞かず、日の目も見ずに、黙つて寝てゐるに、いろんな悲しいこころが思ひ出されて、時には辛棒し切れなくなつたり、もう一生お日様も拜めないやうな心細い氣持になるのだけれぎ、かうやつて時々ハイディちゃんが來て讚美歌を讀んでくれるに、又氣が晴れ晴れして來るのだよ」

すつかり暗くなつたので、ペーテルをせき立てて外へ出るに、やがてお月様がのぼつて雪の原を一面に照らし、あたりは晝のやうに明るくなつた。ペーテルは構を引き出し、ハイディを後に乗つけ

て、風を切つて飛ぶ二羽の小鳥のやうに、山を迂り下りた。

その夜ハイディがふかふかした枯草の寢床に這入つた時、おばあさんのひくい枕や、いろ／＼云つた言葉を思ひ出し、毎日讚美歌さへ讀んで上げられたら、おばあさんはきつ／＼快くなるのに、今度おばあさんの家へ行くまでには一週間も待たなければならぬのだと思ふに、辛くてたまらなかつた。ハイディはさうすればおばあさんの大好きなあの歌を毎日聞かせてあげられるか、一生懸命に考へたが、急なこころを思ひ付き、うれしくつてさても朝まで待ち切れない氣がした。けれどもふに、考へに夢中になつて、この頃寢しなに必ずするお祈りを忘れてゐたこころを思ひ出し、床の上で起き上つて、自分のこころ、おぢいさんのこころ、おばあさんのこころを、一生懸命に神様にお祈りをして、すやすや安らかな眠りに入つた。

十九、冬のつづき

そのあくる日、ペーテルはお辯當を持つて、きちん／＼遅れないで學校にやつて來た。

デルフリの子は、おひるになるに家へ食べ

に歸つたが、家の遠い子は、並んで膝の上にお辨當をひろげて仲よく食べた。一時まではおひる休みで、それから又勉強がはじまる。學校がすむと、ペーテルはハイディの所へ遊びに寄つた。

ペーテルの姿を見るに、ハイディは飛んで来て掴まへた。さつきから待ち兼ねてゐたのである。

「ペーテル、わたし、いいこと考へたのよ」

ハイディはせかせか云つた。

「なんだい」

「あんた、字が讀めるやうに勉強しなきゃいけないわ」

「してらぢやないか」

「そりやさうだけれど、わたしの云ふのは、ほんまに何でも讀めるやうになることなのよ」

「僕、だめなんだ」

「そんなことなくつてよ。誰にでも聞いてごらんなさい。わたし受け合ふわ」

ハイディはきつぱり云つた。

「フランクフルトのおばあさまだつて、もうせん、さう仰しやつたわよ。わたしにも、あんたのいふことなんか、信じちやないけないつて」

ペーテルはびつくりしたやうな顔をしてゐた。

「わたし、あんたに教へてあげるわ。すぐにおけいこするのよ。そしたら、これからはあんたが、毎日一つづつおばあさんに讚美歌を讀んであげられるでせう?」

「いやだ、そんなこと」

ペーテルはぶつぶつ云つた。

こんなに正しい親切なよいことなのに、しかもあんなに楽しみにしてゐたことなのに、ペーテルがいつまでもしつこく拒みつづけるので、ハイディは腹を立て、ペーテルを正面から睨みすゑて、おぎし付けた。

「わたしの云ふ通りにしなかつたら、今にさうなるか、云つてあげませうか。あんたのお母さんは、しよつちう、あんたをフランクフルトへ勉強に出すつて云つてゐるわよ。フランクフルトの學校つて、わたし知つてゐるわよ。クララを馬車で散歩に出た時に見たのよ。それはそれは、とても大きな建物で、大人になつても行く學校よ。先生だつて、わたしたちの學校みたい、やさしい先生が一人つきりなんぢやなくて、とてもきつさりいらつしやるのよ。みんなは教會に行く時みたい、黒い服を着て、帽子だつて、こんなに高いのをか

ぶつてて——」

ハイディは手をのばして帽子の高さをして見せた。ペーテルは背ずちがぞ一つ寒くなつた。

「あんたはそんな人たちと一緒に勉強しなきゃならないのよ。もしかあんなの讀む番が来て、讀めなかつたさしてごらんない。みんなからかはれるか。みんなは、ティネットテよりかもまだ意地悪よ。そのティネットテ来たたら、見せてあげたいくらゐの意地悪なのよ」

「そいぢや、勉強するよ」

ペーテルはなさけなさうな、一方又むしやくしやるやうな聲で云つた。

たちまちハイディの機嫌は直つた。

「いいわ、ぢやすぐ始めませう」。

ハイディはうれしさうにさう云ふと、早速忙しさうに、本を取つて来るやら、ペーテルを机の前に引つ張つて来るやらし始めた。

お醫者様の持つて来て下さつたクララのおみやげの中に、ペーテルを教へるのに丁度持つて來いの本があつた。それは覚えやすいやうに「いろは」を面白い歌に詠み込んだもので、昨夜ハイディは教科書に使はうと決めておいたのである。二人は

机の前に並んでかけ、その本にかがみ込んで、おけいこをはじめた。

はじめの文句を二三度もペーテルに讀ませて見たが、つつかへ通しなので、ハイディはお手本に讀んで聞かせた。

「いろは」を覚えぬ子供には

えんま 閻魔さまからおつかひだ

「行きやしないよ、僕」

ペーテルは強情さうに云つた。

「まあ、さうへ？」

「閻魔さまのミニへさ」

「ああ、そのミニなの？ それば、あんたが早く覚えさへすれば、お使ひなんか來やしないことよ」

ペーテルは一生懸命に、い、ろ、は、の三字を幾度も書いてゐた。

「この三つはもう及第させてあげるわ」

はじめの文句はかうして覚えられたのだから、少し先きの方まで讀んで聞かせて、次ぎへすすむ下地を作つておかうと思ひ、ハイディは澄んだ聲でゆつくり讀んで行つた。

「にほへ」は易しいな

むづかしがるのはお馬鹿さん

「ちりぬるを」忘れるこ

恥をかかねばなりません

「わかよたれそ」はその次ぎに

でないさあみが恐ろしい

「つねならむ」は大いそぎ

「うののおくやま」一さまたぎ

「けふこえて」しまひませう

ハイデイはペーテルがあんまりおこなししいので、何をしてゐるのかと、ちよつと讀み止めた。

歌の中の「閻魔さま」だの、「恥をか」だの、「あみが恐ろし」だのさいふ、覺えのわるい子への懲らしめが、よほさひさくこたへたものさ見え、ペーテルはおびえ切つた顔つきで、ハイデイをぢつと見つめてゐた。氣立のやさしいハイデイはたちまち可哀さうになつて、慰めてやつた。

「こわがらなくつてもいいのよ、ペーテル。これから學校のかへりに毎日來て、今日みたいな調子で勉強して行けば、字なんかちぎにみんな覺えてしまへてよ。そしたら、なんにもこわくなんか

いでせう？ でも、毎日きちんと來なくちや駄目よ。雪が降つたつて、あんたは大丈夫なんでせう？」

ペーテルはハイデイの吩咐けをきちんと守り、歌の文句を膽に銘じながら、毎日一生懸命に勉強した。おぢいさんは煙草をくゆらしながら、時々そばで聞いてゐて、噴き出しさうになることがよくあつた。一生懸命によく勉強した時には、ペーテルは晩御飯の御馳走になつた。さうするこ、さつきまでの勉強の苦しさも、すっかりつぐなはれるのだつた。

かうして冬は過ぎて行つた。ペーテルは字はかなり覺えたが、歌の文句には毎日する分震へ上がらされた。

「あ」をさかさに

間違へりや

こわいところへ連れてくぞ

こハイデイが讀むこ、

「でも、僕は行かなくつてもいいんだよ」

こつぶやきながら、早く覺えてしまはないこ、今にも誰かに襟がみを掴んで引きずつて行かれる

かみ、びくびくして、一生懸命に覚え込むのだつた。

あくる日ハイディは讀んだ。

「きゆめみし」でまごつくち、

壁の杖で打たれるぞ

ペーテルはそつこ壁を見まはしてから、威張つて云つた。

「杖なんか、ありやしないぢやないか」

「だけご、おぢいさんは箱の中に、あんたの腕くらゐも太さのある杖を持つてるの、あんた知らないの？」

ペーテルは、そのはしびみの杖を知つてゐた。

それで慌てゝ本にかがみ込み、「きゆめみし」に取つ組んだ。

その次ぎの日には、

「えひもの書けない子供には

今日はおやつはあげません

ペーテルはバンやチーズのしまつてある戸棚をじろりこ見ながら云つた。

「誰も書けないなんて、云つてやしないぢやない

か」

「ほんさうだわね。ぢや書けるのなら、も一つ先きまで行きませうよ。そしたら、もうあまたつた一つきりよ」

ペーテルはまだ書けなかつたけれど、ハイディがその先きを

「せす」で止まれば

ものわらひ

「學問せす」だご

そしられる

こ讀んだ時、急にあのいかめしい黒い帽子をかぶつたフランクフルトの學生たちが、意地悪な顔をして、大勢で自分を馬鹿にして嘲し立てる有様が目の前に浮び、あわてて「せす」にしがみついた。たうさう何度もやつて見た末に、目をつぶつても書けるやうになつた。

その次ぎの日は、もうたつた一つ覚えればよいだけなので、ペーテルは威張つてやつて來た。

「ん」でおしまひ

いそがうよ

ぐづぐづしてるさ櫻はれる
ホツテントットの住む國へ

ミハイデイが讀むミ、ペーテルは馬鹿にしたやうに云つた。

「そんなもの、何處に住んでるんだか、誰も知らないのに、櫻はれやしなないぢやないか」

「おぢいさんなら知つててよ。待つてらつしやい、わたし訊いて来るわ。今牧師さんさちよつこそこまでいらしつてるんだから」

ハイデイが駈け出さうとするミ、ペーテルは必死になつて悲鳴をあげた。

「お止しよー」

ペーテルはまだ「ん」を覚えてゐないので、おぢいさんミ牧師さんに、ホツテントットの住む國へ櫻はれて行きさうで、こわくてたまらないのだつた。

「どうしたの？」

ハイデイはペーテルがあんまり怖さうにしてるので、びつくりしてたづねた。

「何でもないんだ。だけぎ、行つちやいやだよ。僕、勉強するからね」

でも、ハイデイはホツテントットの住む國つて何處だか訊きたかつたので、訊いて来るミ云ひ張つたが、たうさうペーテルの必死の頼みをきいてやるこゝにした。その代り、「ん」さいふ字をもう決して忘れないまでに覚えさせるばかりでなく、なほその上、今日から新しく字を組み合はせた「こまば」を少しづつ始めるこゝにした。

こんな風にして、毎日がぎんぎん過ぎて行つた。霜が溶けて雪が柔くなり、またその上へあさからあさからミ雪が降り積つたので、ハイデイは三週間もあばあさんのこゝろに行けなかつた。それで、なほのこゝ熱心にペーテルに教へ込み、自分の代りにおばあさんに讚美歌を讀んであげさせようとした。

ある夕方、ペーテルはハイデイのこゝろから歸つて来るミ、いきなり云つた。

「僕、出来るんだ」

「何が出来るんだね、ペーテル」

お母さんはたづねた。

「讀めるんだ」

「ほんたうかい、お前。おばあさん、あれを聞きましたか」

おばあさんは、さうしてそんなことになつたのかと、しきりに不思議さうにしてゐた。

「今から僕、讚美歌を一つ読んであげるよ。ハイディがさうしろつて云つたから」

お母さんは急いで本を取りに行き、おばあさんは久し振りで美しい言葉の聞ける楽しみに、うれしさうに横になつた。ペーテルは机に向つて讀みはじめた。お母さんはそばに付きつきりで、一生懸命に耳をすまし、一ミ區切り毎に、感に堪へぬやうに叫んだ。

「なんぞいふ、思ひがけないことだらう！」

おばあさんはペーテルの讀む一語一語に耳を傾けて聞いてゐるが、口に出してはなんにも云はなかつた。

あくる日、學校で讀み方の時間に、ペーテルの讀む番が来るに、先生は

「ペーテル君はまたぬかすことにしようかね。それとも、ひまつやつて見るかね、その、讀む——んぢやない、君の、文章の中をつまづいてあるくけいこをさ」

さ云つた。ペーテルは本を取り上げ、一度もつつかへずに、すらすら三行讀んだ。

先生は本を下におき、今まで見たことのない不思議なものをでも見るやうに、ためつすがめつペーテルを眺めた揚句に云つた。

「ペーテル君、全く奇蹟だよ。先生はこれまで、ぎれ位骨折つて、辛棒つよく教へ込まうとしたかわからないのに、君は『いろは』さへろくに云へなかつた、それが、さうだ。先生がもうさても駄目だと言つた途端に、急に君は長い文章を間違へもせずに、はつきり讀めるやうになつた。さ。いつたい、今の世に、さうしてこんな奇蹟が起きたんだね」

「ハイディなんです」

先生はびつくりしてハイディの方を見るに、ハイディはごく當り前の無邪氣な顔をして、自分の席に腰かけて居り、一向にそんな奇蹟なご行ふやうな、人間ばなれのした様子もしてゐなかつた。先生は又言葉をつづけ、

「それに、君は何から何まで變つてしまつたぢやないか。もさは一週間も二週間も續けて缺席なんかしてゐたのに、この頃は一日も休まずにやつて来るね。誰が一體君をそんないい子にしてくれたのだね」

「アラムをぢさんです」

先生はますます不思議さうに、ペーテルとハイディの顔を代りばんこに見比べた。

「それでは、もう一ぺんやつて見よう」

先生は要心深くさう云つて、ペーテルに讀ませるに、ペーテルは見事に三行を讀んでのけ、十分腕前を見せた。——ペーテルは、たしかに讀めるのだ。

學校がひけるに、早速先生は牧師さんのところへ駆け付け、ハイディとおぢいさんが二人がかりでなし遂げたこのうれしい話を聞かせた。

毎晩、ペーテルはハイディの云ふことをよく聞いて、讚美歌を一つだけ、おばあさんに讀んであげたが、でも、そんなにすかしても、二つこは讀まなかつた。おばあさんも、強ひては頼まなかつた。お母さんは、息子がこんなにも讀めるやうになつたうれしさがまだぬけきらないで、しよつちう息子の寝顔に見入りながら、さも満足さうに云ふのだつた。

「字だつて讀めるやうになつたんだもの、このさき、まだどんな偉いものにならないとも限らない

よ」

ある晩もお母さんが又かう云ふに、おばあさんは答へた。

「さうだよ、さもなくあの子が発えてくれたのは、結構なことだねえ。だけき、わたしは早く春になつて、又ハイディが来てくれるさいいと思ふよ。ペーテルが讀んでくれる讚美歌は、さうも少し違ふやうなんだよ。こさばが澤山ぬけてゐて、ほんたうのはさうだつたつげなんて思つてゐるうちに、意味がわからなくなつてしまつて、ハイディが讀んでくれた時のやうに、びつたり胸に來ないんだよ」

ほんたうを云ふに、ペーテルは一等めんさうくさくない讀み方をしてゐるのだつた。むづかしい字や、長つたらしい字が來るに、こんなに澤山字があるんだもの、一つや二つぬかしたつて、おばあさんにわかるものかき、ひさりで決め込んで、さんさん飛ばして行くのだつた。だからペーテルの讀む讚美歌は、つまり、大切な字はたいていぬけてゐるさいふことになるのだつた。